



街



中牟田 政也

「これより先、土地勘が無き故。それでは。」

深く頭を下げると、駆け出そうとする。

「待て、待て。案内せよと申したのだ。そのために買うてやったのだぞ。」

「でも、旅の方。」

最後の団子を頬張った。

「言いつけは果たしております。」

顎が痒い。

「のう、童よ。」

「おぬしは、何処に住んでおる。」

「寺の横であります。」

「それで、父は誰だ。」

「上町が組頭、与次郎であります。」

「では、父の姿はよく見ておるな。」

「はい。」

「孝を尽くしておるか。」

「はい。」

「遊び場は。」

「この町全てであります。」

「ではこの街のことは、隅々まで知っておるな。」

「勿論でございます。」

「では案内せよ。」

再度言った。

「しかし」

「言いつけは果たしました。」

「街の外に、船着場があると言うたではないか。」

「町の外にございます。」

「船の一艘はおろか、川すら見えぬぞ。さては謀ったな。」

「父祖に誓い、ありませぬ。」

童の声が震えている。

「過ちて改めざる、是を過ちと謂う。」

「父祖に、天に誓いて、断じてありませぬ。」

「巧言令色、鮮なし仁。」

一歩詰める。

風が土埃を払う。

童の足元が濡れている。

「もうよい。」

「知らぬのなら、初めからそう言え。」

「繰り返す。過ちて改めざる、是を過ちと謂う。心しておけ。」

足元の染みが広がった。

下町に下り、暖簾をくぐる。

「のう。船着場へは、如何に参る。」

「へい。あちらの先を右に。その横が、置屋でありやす。」

「そうか。」

「いつ迄ご滞在で。」

「今日中には出ねばならぬ。」

「さようで。では、次は是非ともご贖目に。」

「泊まる事があればな。」

如何に学ぼうと、所詮は童よ。

何も知らぬ。

川面に、禪が並ぶ。

「瀬渡しは、いくらだ。」

「へい、二つで。」

「高いな。」

「めっそうもない。」

「すぐに出せ。」

「へい。」

こう濁っているのは、魚も見えぬ。

「おい。」

「へい。」

「ここの童は、信用できぬな。」

「何かあったんで。」

「街は全て知っておると言うくせ、上町より外は知らぬと謂うのだ。団子が無駄にしたわ。」

「あっしも、町の事は全て存じておりやすよ。」

「貴様も謂うか。仁を知らぬ街よの。」

「へい。あっしは、仁義なぞわかりやせん。」

「しかし、下町のことは、全て知っておりやす。宿屋の妾が誰かも。」

「さようか。」

「へい。」

「あっしは、下町で生まれ、育ちやした。町とは、下町であり、瀬であり、天地とはこれでやした。」

「さようか。」

「へい。」

「旅のお方は、きっと違うのでしょうか。」

焼けた背には、珠のような汗が浮かぶ。

「しかし、あっしには、これが全てでありやす。」

――己の人を知らざるを憂う

胸によぎったが、ここから上町は、もう遠すぎた。